

西夏王国に於ける 文化の継承問題について

——『聖立義海』に見られるタングート人の
祖先の名と祖先説話をもとに——

大西 啓司

はじめに

西夏王国（982～1227年）は、支配者層を形成するタングート人を中心として、漢人、チベット人、ウイグル人等によって構成された多民族国家であり、その社会には各民族の文化が混在していた。その中でも、西夏王国の支配者層は、儒教思想をはじめとする漢文化に高い関心を持ち、旺盛に受容していた。中国内モンゴル自治区エチナ旗のカラホト遺跡から西夏語訳された漢籍文献が幾つも発見されていることは、それを示している。

また、西夏王国では、西夏文字、漢字に加え、チベット文字、チベット語も使用されていたことが、佐藤貴保、赤木崇敏、坂尻彰宏、呉正科（2007）によって明らかにされている。そして、西夏王国時代に、チベット語から西夏語に翻訳された仏典も多数存在する^①。このように、チベット文化も、西夏王国の領内では盛んであったと考えられる。

従来の研究では、西夏王国に於ける異文化の吸収という側面に関心が集中し、タングート人自身の文化については、注目されない傾向にある。特に、西夏王国の支配者層であるタングート人の文化は、西夏王国に於いてどのように継承されていたのか。そういった具体的様相について検討した研究は、管見の限り見られない。

その主な原因は史料の問題にあらう。遼朝（916～1125年）、金朝（1155～1234年）については、後代に正史（『遼史』、『金史』）が編纂され、それ

をもとに、それぞれの王朝に於ける文化の様相について様々な情報を得ることが出来る。しかし、西夏王国については、後代に正史が編纂されなかった。西夏王国に関する漢籍の基本史料である『宋史』巻485 夏国伝や『統資治通鑑長編』などに記載される西夏王国の記事は、宋朝と西夏王国の外交関係に関する記事がメインとなっているため、例えばタングート人の祖先説話^③についての記載は見られない^④。

タングート人自身の文化と言える、タングート人の祖先説話^⑤に関しては、チベット語史料 *Deb ther dmar po*、カラホト出土西夏語文献「タングート人の聖なる根源を讃える歌」（以下、「讃歌」）、そしてカラホト出土の西夏語詩集などに部分的に見られるのみである（Stein, R.A.1951; 西田龍雄 1997）。

そこで本稿では、西夏王国の最盛期である仁宗（李仁孝）時代（1139～1193年）に於けるタングート人の文化継承の具体相について着目したい。仁宗時代、西夏王国では、類書『類林』、兵法書『六韜』など漢籍の西夏語訳、司馬光（1019～1086年）など宋朝の人物の文章を抜粋して西夏語訳した官箴書『徳行集』が刊行されるなど、西夏王国の支配者層、知識人が漢文化に高い関心を持っていた時期である（佐藤貴保 2006, 123）。

また、この時代には、チベットよりカルマ・カギュ（Karma bKa' rgyud）派の祖師ドゥースムケンパ（'Dus gsum mkhyen pa、1110～1193年）の弟子ツァンボワ・コンチョクセンゲ（gTsang po ba dKon mchog seng ge、?～1218/1219年）を迎え、チベット語から西夏語に訳された仏典が多数刊行された時期でもある。

本稿では、こういった状況の中で編纂された類書『聖立義海』^⑥（以下、『義海』）の記載を考察の基本に据える。

『義海』には、西夏王国で語られていたと考えられている数多くの説話、教訓が収録されており、当時の西夏王国の人々の考え方などを知るのに非常に有益であると考えられる。また、他の西夏語世俗文献を併せて参照しつつ、『義海』が出版された当時、上記のような時代状況の中で、タングート人の文化がどのように継承されていたのかについて検討

したい。

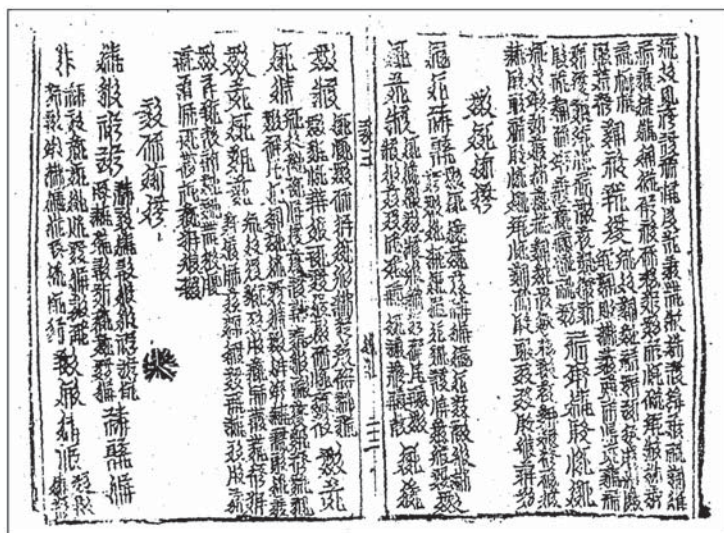
I、『義海』の基礎的情報

『義海』は、1909年にロシアのコズロフ探検隊によってカラホト遺跡で発見された。現在は、ロシア科学アカデミー東方文献研究所（以下、東方研）に収蔵されている。東方研に於ける収蔵番号は、旧文書番号 инв.143、144、145、684、2614（Горбачева, З.И. & Кычанов, Е.И.1963, 57）、新整理番号は инв.115、Tang32/1、инв.116、Tang32/2、инв.117、Tang32/3、инв.118、Tang32/4、инв.119、Tang32/5である。東方研に所蔵される西夏語文書の収蔵番号は、2006年に新番号に付け直されたが、現在のところ新番号に基づく目録は出版されていない。『義海』の閲覧を旧番号で申請する際には、旧番号の典拠となる資料を併せて明記し申請する必要がある（伊藤一馬^⑦2012, 164）。

『義海』の体裁は、胡蝶装で、使用されている紙の大きさは、22.7×16cm、テキスト面は18.8cm×13.2cm、西夏語でやや崩れた西夏文字楷書体にて印刷されている。現在までに、克恰諾夫、李範文、羅矛昆（1995）、Кычанов, Е.И.（1997）、『俄藏黑水城文献』（以下、『俄藏』）シリーズ第10巻に写真版が掲載されている。また、東洋文庫には、マイクロフィルム版（T0032;I0689、0144、0148、2614、0145）が将来されている。これらの、写真版、マイクロフィルムによって、現在では『義海』原典を参照することが容易となっている。

また、克恰諾夫、李範文、羅矛昆^⑧（1995）の中国語訳（以下、中国語訳）、Кычанов（1997）のロシア語訳（以下、ロシア語訳）が既に発表されている。ただし、これらの翻訳は、『義海』原典の西夏文字を筆者がどう判読したのかを示す根拠となる録文が提示されておらず、訳出の根拠も示されていない。これらの問題点があるため、翻訳の利用には注意が必要である。

『義海』は、ある特定の漢語原典から西夏語に翻訳されたものではなく、西夏王国にて新たに編纂された類書（百科事典）である。類書とは、

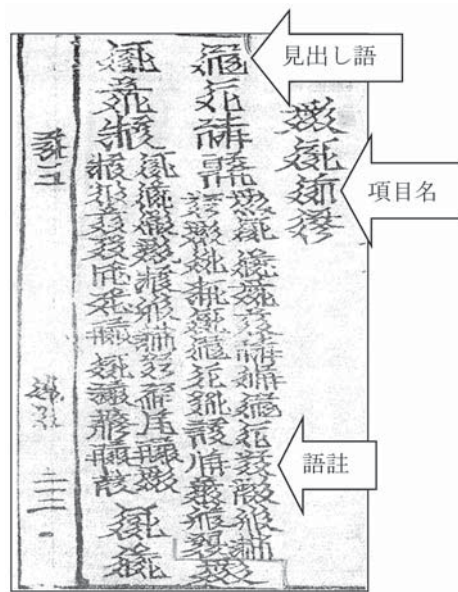


『義海』〔克恰諾夫、李範文、羅矛昆（1995, 80）より引用〕

その類目毎にそれに関連した語句や文章を、各文献から網羅的に集めて配列した文献である。^⑨『義海』では、「天」、「地」、「人」の三才の分類に基づいて分類項目を立て、西夏王国の自然、社会状況などについて詳述されている。そして、内容の記述形式は、各事例を見出し語として大文字の西夏文字で示し、その下に小さな西夏文字で注釈を施すというスタイルである（次ページの画像は、ロシア語訳写真版より引用）。

版心には略題として、『聖立義海』の「立」を意味する西夏文字「𐵄」、
『夏漢』No.0678、その下に漢字で巻数が刻まれている。その下部には
幾つかの人姓と見られる西夏文字が記されており、恐らく、刻工の名前
と考えられる。^⑩また、版心の一番下には、頁数が漢字で記される。

現存する『義海』の目次部分から考えてみると、元来は全15巻存在したが、現在残っているのは、巻1、巻3、巻4の一部、巻13、巻14、巻15のみである（中国語訳：30）。また、刊本のみが現存しており、管見の限り写本などは見つかっていない。元来の量から考えると、現存する『義海』の分量は4分の1程度であるが、西夏王国の歴史、社会を研究



する上で重要な史料と評価されている（史金波 1999, 54）。

筆者は、2012 年 2 月にロシアのサンクトペテルブルクの東方研にて、『義海』を実見調査した。その際、従来発表されている写真版にて判読しづらかった箇所を重点的に調査することが出来た。本稿では『義海』の内容を引用する際、他の写真版よりも比較的鮮明なロシア語訳に掲載されている写真版を底本とし、『俄藏』写真版、中国語訳に掲載される写真版も併せて参照した。加えて、実見調査の成果を盛り込んで日本語に訳出する。

Ⅱ、『義海』の出版年代、編纂者、編纂の目的

それでは、『義海』の出版年代、編纂者、編纂の目的について見ておく。まず、『義海』の出版年代について見てみる。『義海』巻 1 の末尾には、以下のような記述が見られる。^⑪ 以下、引用史料中の〔 〕内、下線部

は筆者による。

乾祐壬寅 13 年 (1182) 5 月 10 日、刻字司に於いて〔版を〕新たに起こして印刷した。

ここには、西夏王国の乾祐 13 年 (1182) 年、西夏王国の印刷局である刻字司より「〔版を〕新たに起こして印刷した」と記されており、現在我々が見ることのできる『義海』の版本は、仁宗の治世である 1182 年に出版された官刻本¹²⁾ (西夏王朝の印刷局による刊行物)、かつ再版本であることが分かる。

官刻本とは、刻字司に於いて、牒板、印刷されたもので、使用される用紙は紙工院という役所が管轄していた。刻字司は、官刻本の書物を出版する官庁であり、2 人の頭監 (監督官) が管轄し、その任には番大学院¹³⁾の学士があたった。つまり、『義海』の出版には、番大学院の学士が携わっていたことになる。番大学院とは、西夏王国に於ける官僚養成機関で、番大学院、漢大学院が存在した。この 2 つの大学院は教授に使用する言語 (西夏語、漢語) によって分かれていた。

『義海』が出版された西夏王国の乾祐年間 (1170～1193 年) は、西夏王国に於いて官刻本が数多く出版されていた時期である。漢語原典から西夏語に訳された類書『類林』は、西夏王国の乾祐 12 年 (1181) に、西夏語によって記された詩集『礼詩文』、『大詩』、『月月楽詩』、『智慧詩』は、乾祐 14 年 (1183 年) にそれぞれ刻字司より刊行されている (西田 1986, 19)。

また、刻字司による官刻本と考えられるものとして、西夏文字を韻母別に配列し、文字の構成要素、字義を解説した『文海』もある。『文海』は、1130 年ごろの宋朝・斉朝 (金朝の傀儡政権) の文書紙背に印刷された状態で見つかったことから、1130 年ごろ以降に出版されたと推定される。西夏語の文字書、韻書はそのほとんどが崇宗 (李乾順、在位 1086～1139 年)、次の仁宗時代に出版されているので、『文海』もその期間に

出版されたと考えられる。また、『文海』は、西夏語の正統性を保ち、普及させるために生み出されたものなので、おそらく官刻本であると考えられる。

松澤博 (1982, 331 ~ 332) は、官刻本は西夏王国の文字や言語が誤り無く伝達されるように作られたもので、『義海』の供給対象は、官僚、僧侶、学生等の知識人であったと述べている。『義海』は官刻本であり、西夏語のみで記されていることから見て、西夏王国内のタングート人知識人向けのテキストとして作成されたと推測される。

次に、『義海』序文から、編纂者、編纂の目的に関する情報を見ておこう。『義海』序文には、以下のような記載が見られる。¹⁴⁾

仏法、道士は諸々の俗人を教化し、王法は国土に設けられて民の諸事を決定する。諸々の宝物は内容により利益を受ける。宝物を管理し、野獣を狩ることを常に求める。世界に存在する事柄の名前は廣大であり、文章によって記される。国の多くの行事は内容ある文字によって明らかになる。仏法の世界の經典は、徳ある行いの礼儀であり、王の儀式の礼儀は歌詩の賦の中にある。選んで利益を獲得し、根本を調べると雄弁であり、選んでその義を論じ、知ることによって作る。天下の諸物は、空虚な辺境の土地に等しく、地上の名前や号は、海の如く広い。臣らは、知識が少なく努力するも、弁舌、事象に関する巻冊は未だ正確ではない。後世の智者に従う。

■語註

- ・臣…原文は「𐽀、『夏漢』No.3508¹⁵⁾」。「丞相、宰相」を意味する。『同音』背注¹⁶⁾には「皇帝の下属。庶民を治め養う者」とされている〈『同音』丁種本 3A54〉。

このように、『義海』序文に、編纂者について「臣ら」と言っているところからは、編者について具体的なことは分からない。しかし、おそらく

くそれまでの段階で得られた、西夏王国に関する知識を整理するために、西夏王国の知識人が中心となって編纂され、番大学院の学士によって出版されたと考えられる。

それでは次に、『義海』を利用した先行研究について述べたい。まず、西田（1997）は、『義海』の幾つかの記述を紹介し、西夏王国社会の多様性、風俗について述べた。次に、聶鴻音、黄振華（2001）は、『義海』に見られる故事の出典について検討したものである。また、張迎勝（2006;2008）は、西夏に於ける天神崇拜、自然崇拜に関して『義海』の記述を利用している。そして、佐藤貴保、赤木崇敏、坂尻彰宏、呉正科（2007）は、西夏王国の信仰に関連して『義海』の記述を用いている。一方、中国では、楊蕤（2008）が、西夏王国に関する歴史地理学の史料として『義海』の記述を活用し、西夏王国の歴史地理について検討している。

以上のように、先行研究では、西夏王国の文化、習俗、信仰、地理などについての史料として、『義海』の記述が活用されてきた。しかし、筆者が触れた問題関心について、『義海』の記述を利用した研究は見られない。そこで、次章ではタングート人の祖先説話に関する『義海』の記述を取り上げたい。

Ⅲ、『義海』に見られるタングート人の祖先説話

西田（1988～1990, 376）が既に指摘しているように、類書である『義海』には、中国古典からの引用と考えられる記載が数多く見られる。その一方で、タングート人の祖先に関係すると思われる記載も、『義海』の中には幾つか見られるのである（中国語訳：10～11）。それでは以下に、『義海』に見られる関連する記載を取り上げたい。

『義海』巻15^⑪には、「家族、親族、奴隸」などに関して説明する項目が列挙される。その中で、「母方のオジ、甥の名前、意味」という項目^⑫に於いては、「母方のオジと甥」の関係性について説明されている。そこに

は、5つの見出し語が見られ、その中に「母方のオジの世界に甥が逃げる」、「母方のオジの世界にて甥の行いが驕る」という見出し語が見られる。そして、この2つの見出し語には、タングート人の祖先説話が引用されている。それでは、この2つの項目の日本語訳、語註を以下に掲げる。

「母方のオジの世界に甥が逃げる」

昔、縹縹 (lpo lnyu) に於いては、爰 (lrur) 神の子を屋内にて殺した。〔それ故に〕天神に追われ、母方のオジの白高九兄〔弟〕の所に逃げた。母方のオジ〔の白高九兄〕は孝心によって、〔天神に〕財物を捧げ、〔甥の〕命を救った。¹⁹⁾

■ 語註

- ・ 縹縹 (lpo lnyu) に於いては…この一文は、中国語訳、ロシア語訳で大幅に解釈が異なっている部分である。中国語訳:80 では「lpo は場内の狭いところで、神の子を郊外に於いて殺した。」とし、ロシア語訳:148 では「Мбуну に於いて神の子 Рие が殺された。」とある。中国語訳、ロシア語訳とも録文を示していないので、原文の文字をどう判断したかは定かでない。この中国語訳、ロシア語訳の解釈の相違は、語註の3、4文字目をどう判読するかによって生じていると思われる。まず、中国語訳は、3文字目を「縹、lpo」というタングート姓を表す固有名詞と解釈し、4文字目を「城」を意味する「縹、『夏漢』No.0290」という西夏文字に解釈して訳出したと考えられる。一方、ロシア語訳は語註の3、4文字目をまとめて「Мбуну」として、固有名詞かつ地名と解釈し訳出したと考えられる。ロシア語訳の解釈は、3文字目に関しては中国語訳と同じであるが、4文字目は「縹、推定音 lnyu、『夏漢』No.0399」という文字に解釈していると考えられる。東方研での実見調査の結果、語註の4文字目は、明らかに「縹、推定音 lnyu」(『夏漢』No.0399)と読み取ることが出来た。語註の5文字目を見ると、

「～に於いて」を意味する「𐰽𐰚、推定音 2u、『夏漢』No.2983」という文字が置かれている。この格助詞は、「世界」「国」「城」など、一定の範囲を持ち、個々に分割出来ない名詞に後続する例が多い（荒川 2010, 162）。そこで、ここでは「lpo lnyu に於いては」と解釈する。

- ・𐰽 (lrur) 神…語註 6 文字目には「狭い」を意味する文字（『夏漢』No.3287、推定音 lrur）が来ている。ここでは「狭い」と解釈すると文意が通じないため、「lrur」という音を示していると解釈し、「lrur 神」とした。「神」と訳した語句の原文は「𐰽、『夏漢』No.4953、推定音 2si:」である。西夏語－漢語用語集『番漢合時掌中珠』（以下、『掌中珠』）には、「天神地祇」の「祇」に対応する語句としてこの文字が使用されている（『俄藏』10 卷：29）。
- ・白高九兄〔弟〕…原文は「𐰽𐰚 𐰽𐰚」。この語句は他の文献に用例が無く、詳細不明である。ただし、「𐰽𐰚（白高）」という語句について見てみると、西夏王国は、国名として「𐰽𐰚（白高）国、大白高国」と自称していた（ニコライ・ネフスキー、石濱純太郎 1933；Kepping, K.1995）。この「白高九兄」の「白高」もそれと関係するものであり、タングート人と深く関係する語句と考えられる。また、『クチャーノフ辞典』（СТЯ: 375-10）には「白高」について“the place of the origin of the nine brothers.”と説明されている。

「母方のオジの世界にて甥の行ないが驕る」

昔、𐰽𐰚 (lla' lge:) と 𐰽𐰚 (llyu lmi:') の父親が悪魔の為に殺されたので、〔彼らは〕仇を討たんと欲した。1ml' と力比べをしたが勝てず、𐰽𐰚 (llyu lmi:') は自ら母方のオジの 𐰽𐰚 (2de: 2bi:q) 三兄弟のもとへ行き、神の助けを求めた。〔その結果〕悪魔の頭を下し〔＝悪魔に勝ち〕、父親の仇をとった。

■語註

- ・𐰇𐰣 (1la' lge:) と𐰇𐰣 (1jyu lmi:') …この部分は「𐰇𐰣𐰇𐰣 (1la' lge:ljyu lmi:')」と解釈することも出来るが、後述するようにタングート人の先祖の人名として「𐰇𐰣 (1la' lge:)」が見られるため、ここでは「𐰇𐰣 (1la' lge:) と𐰇𐰣 (1jyu lmi:')」という 2 人の人物と解釈した。
- ・1ml' …原文は「𐰇𐰣、推定音 1ml'」。『文海』には「災難を為し、損害を与える者である。〈『文海』:40/251〉」とある。『同音』の背注には「鬼の名」と注記されている〈『同音』丁種本、背注 4A16〉。
- ・𐰇𐰣 (2de: 2bi:q) 三兄弟…「𐰇𐰣 (2de: 2bi:q)」は、タングート姓として『文海』、『雑字』などの文献には見られない。「𐰇 (2de:)」𐰣 (2bi:q)」は、それぞれ単独の意味に於いては、タングート姓を表す。他の文献にも用例は見られず、詳細は不明である。

上記の 2 つの語註に登場する人物には、「𐰇𐰣 (1po lnyu)」𐰇𐰣 (1la' lge:)」というものが見られる。そこで、「𐰇𐰣 (1po lnyu)」について『文海』の「𐰇 (1po)」という文字の説明を見てみると、以下のようにある。

𐰇 (1po) は、𐰇𐰣 (1po lnyu) である。タングート姓である。また官人の族姓を言うものである。〈『文海』: 8/252〉

このように、「𐰇𐰣 (1po lnyu)」とは「𐰇 (1po)」であり、タングート姓、「官人の族姓」としていることが分かる。また『文海』の「𐰇、『夏漢』No.2662、推定音 lgyer)」という文字の説明として、

𐰇 (lgyer) は、タングート姓である。または𐰇𐰣 (1lon lgyer) とも言う。𐰇𐰣 (1po lnyu) の兄である。〈『文海』: 89/221〉

■語註

- ・𐰇𐰣 (1lon lgyer) …𐰇𐰣 (1lon lgyer) という姓は、『西夏文雑字』の番

(タングート) 族姓の項目の中に見出すことが出来る (『雑字』: 122)。

という記述が見られる。このように『文海』には、「𐰽𐰚𐰚 (lpo lnyu)」の兄「𐰽𐰚 (lloŋ lgyer)」という人物の名前が記されている。つまり、過去にそういった人物が存在していたと考えられていたことが分かる。恐らく、タングート人の祖先の「𐰽𐰚 (lpo lnyu)」𐰽𐰚 (lloŋ lgyer)」という人物の名前がエポニム (eponym) として、タングート姓に使用されるようになったと考えられる。これは、タングート人の姓の成り立ちを示す興味深いケースである。

次に、𐰽𐰚 (lla' lge:)、𐰽𐰚 (lgyu lmi:') について、『文海』を検索すると、タングート姓を示す「𐰽 (lge:)」という文字の説明に、

𐰽 (lge:) は人の姓であり、先祖の人名、𐰽𐰚 (lge: ldzon) や𐰽𐰚 (lla' lge:) などを言う。〈『文海』: 48/262〉

という記載を見出すことが出来る。これを見ると「𐰽 (lge:)」という文字は、「𐰽𐰚 (lge: ldzon)」や「𐰽𐰚 (lla' lge:)」というタングート人の先祖の名前を示すことが分かる。このように、語註に登場する人名の「𐰽𐰚 (lla' lge:)」もタングート人の先祖の名前「𐰽𐰚 (lla' lge:)」と関係するものであると考えられる。

語註に引用されている話は、「𐰽𐰚 (lla' lge:) と𐰽𐰚 (lgyu lmi:')」が、悪魔によって殺された父親の仇を討つため、母方のオジを通じて、神の助力を得て復讐を果たしたというものである。見出し語となっている「母方のオジの世界にて甥の行ないが驕る」の「驕る」という部分は、自らの父親の仇を討つために、母方のオジの助けを借りることは驕った行為であるという意味を表すと考えられる。

以上に掲げた語註の話に登場する人物が、タングート姓を有していること、そして、これらの話がいずれも「昔、～」という出だしから始まっていることから考えると、ロシア語訳: 191 が指摘するように、これら

の話は、タングート人の伝承に属する説話であると考えて良い。

『義海』には「父方のオジと甥の名前、意味」という項目が立てられており、こちらには「父方のオジ」と甥の関係性が緊密であることについて述べられる。「父方のオジと甥の名前、意味」に於いても「父方のオジ」と甥の関係性が緊密であることを示す説話が語註に引用されているが、こちらには、タングート姓をもった人物は登場せず、タングート人の祖先に関する説話ではないと考えられる。つまり、「母方のオジと甥」の項目にのみタングート人の祖先説話が引用されていることになる。

西夏王国では、皇帝の李元昊（在位 1032～1048 年）、李諒祚（在位 1048～1067 年）、李秉常（在位 1068～1086 年）が母方のオジの娘と婚姻するなど（史 1995, 8）、母方のオジとの関係性は強かったと考えられる。母方のオジの娘と婚姻することは、則ち「交叉イトコ婚」²⁰を意味する。父系外婚制のもとで交叉イトコ婚を選好するチベット社会では、姻族の長「母方のオジ」は重要な存在であった（長野 1993, 120）。例えば、古代チベット王国（吐蕃）に於いても、母方の親族（zhang po）の代表者「母方のオジ」たる「zhang」は極めて重要な存在であった。

『義海』「母方のオジと甥の名前、意味」からは、西夏王国に於いても「母方のオジ」が尊重される社会であったことを窺い知ることが出来る。また、そのような背景の中で、「母方のオジが甥を助ける」などの説話が伝承されていたのであろう。史（2004, 68）は、西夏王国の戸籍文書を分析すると、戸主が母方一族から嫁をもらっている例があることを指摘し、西夏王国社会に於いて母方の一族から嫁をもらう習慣が残っていたと指摘している。

次に、「氍毹（Ipo Inyu）」は、『義海』巻 15「奴隸、奴婢の名前、意味」という項目にも登場する。この「氍毹（Ipo Inyu）」が『義海』のこの項目にも見られるということは従来知られていない。

これらの話は「氍毹（Ipo Inyu）」というタングート人の祖先に関連する祖先説話であると考えられる。タングート人の祖先説話に関する零細な史料状況を見る限り、それに関する情報を各文献から抽出、集積して

いくことは、西夏王国の文化史、特にタングート人の文化を解明していく上で重要な意味があろう。

それでは「鞞鞞 (lpo lnyu)」があらわれる、『義海』「奴婢の名前、意味」の「奴隷が虎を捕らえて主人を救った」という見出し語に付されている語註をあげる。そこには、以下のような説話が引用されている。^②

「奴隷が虎を捕まえて主人を救った」

昔、鞞鞞 (lpo lnyu) [という] 聖なる夫に妻 [として] 鞞鞞 (lkhu ldyu 2e:) 氏が、[第] 15 [番目の] 夜に嫁に來た。[その時] 虎がさらって行ってしまった。[lpo lnyu の] 奴隷は [虎を] 追って行って虎を殺し、虎の口から [lpo lnyu の] 妻を取り出した。故に名前を「奴隷が虎を捕らえた」と言われた。

■語註

- ・鞞鞞 (lpo lnyu) [という] 聖なる夫…中国語訳:91 では「謀梯神」と翻訳され、「タングート人の神話に登場する人物」、あるいは「タングート人の祖先」と解釈されている。また、ロシア語訳:164～165, 197 では「Мбунундин 主人」と訳され、「奴隷が虎を捕らえて主人を救った」に引用されている説話についての情報は、他に見られないとしながらも、あるいは中国由来の伝承という可能性もあると解釈している。実見調査の結果、この箇所は「鞞鞞 (lpo lnyu)」と読むべきであり、人物名と解釈出来る。
- ・鞞鞞 (lkhu ldyu 2e:) 氏…一文字目は「碧色の」、二文字目は「有る」、三文字目は「乙」などの音写に用いられる文字である。ここでは推定音にて「lkhu ldyu 2e:」と表記する。また、「氏」と訳した文字について『文海』には「婦人の族姓が何氏であるかを言う」とある(『文海』: 77/212)。

以上のように、この説話も鞞鞞 (lpo lnyu) に関するものであり、『義

海』に関連する説話が2例見られることが明らかとなった。それでは、この纛纛 (lpo lnyu) に関する祖先説話2つは、これまでの史料に見られるものなのか。タングート人の伝承に関する記載が見られる、チベット語史料 *Deb ther dmar po*、西夏語史料「讃歌」を見ても、それに類する祖先説話は見られない(DM: 26～27; Кычанов, Е.И.1968, 219～221)。故に、『義海』に見られるタングート人の祖先説話は、従来知られているものとは別の系統に属するものであることが分かる。

IV、西夏語の文字書、韻書、格言集に見られるタングート人の祖先の名に関する記載

『義海』には、祖先説話以外に、タングート人の祖先の名に関する記載も見出すことが出来る。『義海』13巻には、人間の性質のランクを上から順に「聖人、仁人、智人、君子、人人、廉人、士人、俗人、奴人」に分け、それぞれのランクに該当する人の性質について、詳しく述べている。その中で、ちょうど真ん中のレベルに属する人である「人人」の性質について説明する、「人人の名前、意味」という項目の「謀を巡らすこと深し」という見出し語には、次のような語註がつけられている。²²⁾

纛 (lbi) の如く謀は大きく、〔領土を〕 広大にする。謀は深く、才能は高く、腕をふるって成し遂げる。

この語註に見られる「纛 (lbi)」について、『文海』の字義説明を見ると、以下のように記されている。

纛 (lbi) は、筭纛 (2li:q' lbi) 〔と同義〕である。黒頭の父であり、先人の名である。〈『文海』: 33/251〉

■語註

- ・黒頭…タングート人の自称。

ここに「朮 (1bI)」とは、「黒頭の父であり、先人の名」とあるように、「朮 (1bI)」とは、タングート人の祖先を指す。ここで、「先人」として言及されているのは、この中では、タングート人の祖先「朮 (1bI)」を指して「先人」と言っているのです、ここで言う「先人」とは、タングート人の「先人」と考えて良いと思われる。上記の語註は、タングート人の祖先「朮 (1bI)」のように、謀に優れ領土を拡大する人物は「人人」のレベルであると説明しているのである。

続いて、『義海』巻1「太陽の名前、意味」という項目を見てみる。この項目は「天」、中でも「太陽」について説明するものである。その中の、「世界を放牧する」という見出し語には、

𐰽𐰺𐰍 (1'u 2lon) が世界を放牧する。太陽は丸い。

という語註が付けられている。^② この「世界を放牧する」という「𐰽𐰺𐰍 (1'u 2lon)」について、「𐰽 (1'u)」という文字についての『文海』の説明を見ると、

𐰽 (1'u) は、𐰽𐰺𐰍 (2li:q' 1bI) の子の𐰽𐰺𐰍 (1'u 2lon) のことをいう。
〈『文海』：10/241〉

と記されており、この「𐰽 (1'u)」あるいは「𐰽𐰺𐰍 (1'u 2lon)」とは、前述した「朮 (1bI)」、「𐰽𐰺𐰍 (2li:q' 1bI)」の子であり、タングート人の祖先の1人であることが分かる。

つまり、これまで述べてきたように、『義海』には、タングート人の祖先説話、そしてタングート人の祖先の名に関する記載が収録されている。『義海』は類書であり、類目毎にそれに関した語句や文章を、各文献から

網羅的に集めて配列したものである。それならば、『義海』に見られるタングート人の説話、祖先に関する記載も、書物による情報から『義海』に採録されたものであると想定される。それならば、『義海』が出版された仁宗時代の西夏王国には、タングート人の祖先の名に関する情報が存在し、それが記された書籍が存在したと考えることが出来る。それでは、この点について、『義海』以外の西夏語世俗文献から検討したい。

『義海』の作成された仁宗時代、先代の崇宗時代、西夏王国に於いては、西夏文字の音韻を記した韻書、西夏文字の字義を記した字書、西夏語の単語集、西夏語の格言集が発行された。その中で、字書『文海』、『文海雑類』、韻書『同音』背注の語彙を見ると、その中にタングート人の祖先の名に関する記載が見られる。それでは以下に見ていきたい。

『文海』、あるいは『文海』と同系統の字書『文海雑類』から、タングート人の祖先の名を示す語彙を検索すると、以下のようなものが見られる。また、以下の表には同書に記される文字の字義説明を併せて記載した。

西夏文字 / 西夏文字推定音 / 『夏漢』 No.	『文海』『文海雑類』の字義説明	典 拠
𐽀 /lhjij/ No.0307	先人 (𐽀𐽁) の名前の𐽀𐽁𐽂𐽃 (lli:q' 1bI lhjih 2lon) を言うものである。	『文海雑類』: 20/161
𐽄 /1ma:/ No.1803	𐽄𐽅 (2le: 1khe:) である。先人の名前である。	『文海』: 28/171
𐽆 /1po/ No.2155	先人の名前である。	『文海』: 55/272
𐽈 /2lon/ No.2204	先人の名前の𐽀𐽁𐽂𐽃 (lli:q' 1bI lhjih 2lon) を言うものである。	『文海雑類』: 20/161
𐽊 /1tsa/ No.3097	先人の名前である。官を言う。	『文海』: 24/241
𐽌 /1lhenq/ No.4914	先祖の族姓 (𐽍𐽌) 1lhenq を言う。	『文海』: 68/171

𐵄 /1tsyu/ No.5012	先人の名前である。	『文海』： 7/212
𐵆 /1bl/ No.5031	𐵆𐵆 (1li:q' 1bl) である。黒頭の父であり、先人の名前である。	『文海』： 33/251
𐵇 /1ge:/ No.5187	人姓であり、先人の人名 𐵇𐵆 (1ge: 1dzon) や𐵇𐵆 (1la' 1ge:) などを言う。	『文海』： 48/262
𐵈 /2dzya:/ No.5629	𐵈 (2dzya:) は𐵈𐵈 (2tsyIr 2dzya:) である。先人の名前である。	『文海雑類』： 18/32

※筆者作成

以上のように、『文海』、『文海雑類』の字義説明には、「先人」に関する記載が見られる。前述したように、『文海』は官刻本であり、1130 年ごろ以降に出版されたと考えられている。また、『文海雑類』は、『文海』を補完するものとして出版されたので、『文海』出版よりも後の時代に出版されたことになる。つまり、『文海』、『文海雑類』は、崇宗～仁宗時代には出版されていたことになる。そうした『文海』、『文海雑類』に、以上のようなタングート人の祖先の名に関する記載を見出すことが出来ることは、崇宗～仁宗時代にそういった情報を記す書籍が西夏王国に於いて存在していたことを意味する。

次に、『同音』背注の記載を見てみる。『同音』とは、西夏文字を声母別に分類した韻書であり、正徳 6 年 (1132) 刊本 (旧版) と、乾祐 7 年 (1176) 刊本 (新版) が現存している。ここでは、『同音』(旧版、1132 年刊) の背注の記載を見てみる。『同音』には幾つかの版本が存在し、『俄蔵』にて丁種本に分類される版本には、裏面に草書体西夏文字にて注記がなされているものがある (以下、背注とする)。管見の限り、草書体西夏文字で記されている文書は、西夏王国時代に属すものに限られる。故に、この背注も、西夏王国時代に記されたものと考えて良い。

『同音』背注にのみ見られる「先人」を示す語彙には、以下のようなものがある。

	西夏文字／推定音／『夏漢』No.	背 注	典 拠
1	𐽀 /2dzyuq/ No. 0992	先人の名前である。	『同音』丁種本 31A 背注 (『俄藏』 7:116)
2	𐽁 /1phu/ No.2228	先人の名前である。	『同音』丁種本 7A 背注 (『俄藏』 7:69)
3	𐽂 /2myu/ No.3409	昔のタングート人の兄である。	『同音』丁種本 7A 背注 (『俄藏』 7:69)
4	𐽃 /2gl:q' / No. 4728	先人の姓である。	『同音』丁種本 26A 背注 (『俄藏』 7:107)
4	𐽄 /2myeq' / No.4904	昔の人名𐽀𐽁𐽂𐽃 (1khya 1ryeq' 1bl 1zi:) である。	『同音』丁種本 3B 背注 (『俄藏』 7:61)

※筆者作成

以上に見られるように、『同音』背注には、他の文献に見られないタングート人の祖先の名に関するものが記されていることが分かる。つまり、他にもこういったタングート人の祖先の名に関する情報が存在した可能性もあると言える。

しかし一方で、仁宗時代の乾祐 21 年 (1190 年) に出版された西夏語—漢語の対訳単語集『番漢合時掌中珠』(私刻本、以下、『掌中珠』)を見ると、タングート人の祖先に関する記載は、一切収録されていない。『掌中珠』は、西夏王国内のタングート人と漢人が相互にコミュニケーションを取る目的のために作成されたものである。そういった、より実用的な書物である『掌中珠』にタングート人の祖先の名に関する情報を収録する優先度は低かったと見られ、そのために『掌中珠』には収録されなかったと考えられる。

また次に、仁宗時代の 1176～1187 年に刊行された、西夏語の格言集『新集錦合道理』(以下『道理』)を見てみる。『道理』は、西夏王国の民間にて出版された私刻本である。『道理』の記載には、以下のような格言

が見られる。^{②⑤}

筭蘄 (2li:q' 1bI) は天の婿であり、血族の勢力は益々盛んである。天女は民の婦女であり、部族の威光は益々高い。

この格言が意味すること自体は、必ずしも明瞭なものではない。しかし、ここで言う「筭蘄 (2li:q' 1bI)」とは、先述の『文海』に見られるタングート人の祖先「筭蘄 (2li:q' 1bI)」であることは言うまでもない。

このように、タングート人の祖先の名に関する情報は、『義海』以外の他の西夏語世俗文献にも見られるものがあることが分かった。則ち、当時そういった情報は確実に存在したと言える。では、『義海』はそういった情報をどのようなものから採録したのか。そこには、何か情報源となる文献の存在が想定される。

V. タングート人の祖先に関して記す文献

それでは次に、『義海』が情報源としたと考えられる、タングート人の祖先に関する情報の見られる文献が当時存在したかの可否について、その可能性を検討したい。その際に、参考となるのは、『道理』の序文、跋文である。

『道理』には、序文、跋文が残されており、松澤 (1982, 324～325) によって全文が日本語訳されている。『道理』序文には、欠落部が見られるが、西田 (2005) によってスタイン収集西夏語文書 (『英蔵』2巻: 219～221) に収録される『道理』の抄本に付されている序文から補うことが出来ることが明らかにされた。そこで、抄本に付された序文によって欠を補いつつ日本語訳すると以下のようなになる。^{②⑥}

御史承旨 西夏学匠 梁德育。序に曰く、今、格言とは人が生じる神の昔の過去の言説より、今に至る妙句を流伝するものである。幾

千の諸部は儀式を捨てず、幾万の庶民も格言を捨てない。かくのごとく、探し信じると雖も、句の数は多くある。諸本の中には序が散逸していることにより説者の句義が正しくなく、体と文を共にすることが少ない。それにより徳育は諸文の中に、種々の事を引き備える能弁なる句を探し、諸義の綱に従い語詞を案じながら撰じた。句と句は相い受けて智者の道を説き、文と文は調和して愚蒙に礼を述べる。かくのごとく、種義、諸事を説くところの格言の体はほぼ既に集めた。(以下略)

これによれば、『道理』は、御史承旨の梁徳育によって、「諸文の中」より「能弁なる句」「種義、諸事を説くところの格言」を収集し撰じられたことが分かる。梁徳育は、『同音』(新版)²⁸、西夏語類語集『同義一類』(1188年成立)の編者としても名が挙げられているように、西夏語に関する豊富な知識を有した人物であったと考えられる。

また、跋文には以下のようにある(□は読みとることの出来ない文字を示す。)

新集錦合道理 1 巻 終わる

それ道理は先に乾祐丙申 7 年に西夏の学匠、梁徳育が編纂した。本体の幾つかを集め得ようとしたが、実際には未だ終わることなしに、〔梁徳〕育は死去した。□□その本には手を加えず、不明なまま残した。□□先には賢者の功績を顧み、後には凡の利となすことを望む所以である。仁持□を首尾に加えて備えさせ、彫印して世間に流布させる。智者は見ることを嫌うことなかれ。(以下略)

この跋文には、「先には賢者の功績を顧み」ることを望んで、「彫印して世間に流布させる」ことが目的とあるので、西夏王国社会への流布を目的として『道理』は作成されたと言える。実際に、『道理』については写本、抄本も確認されているので、ある程度社会に於いて流通していた

と考えられる(松澤 1982, 335～341; 西田 2007, 547～550)。

『道理』の序文を見ると、編者が当時参照することの出来た書籍の中から格言を引用していることが明言されている。『道理』に、タングート人の祖先「𐽀𐽁𐽂 (2li:q' 1bI)」に関する言及があることは、『道理』出版当時(1176～1187年)の仁宗統治下の西夏王国社会に、タングート人の祖先に関して言及する文献が存在したことをも意味する。それでは、タングートの祖先に関する情報は、どのような形として存在していたのか。示唆的な記述として、『道理』には次のような格言が見られる。^③

タングート人の儀式的雄弁なことには終わりが無い。𐽀 (2mi:、タングート人)の格言に言われていることは歴史がある。

おそらく、このようなタングート人の間で語られていた「𐽀 (2mi:)の格言」として存在していたと考えられる。そのような、タングート人の「口頭伝承」と言える格言などのタングート人の祖先について記す文献から、『道理』へという格言の採集経路を想定することが出来よう。そういった文献が存在したということは、同じようにまた、タングート人の祖先に関する言及のある本が存在し、そこから『義海』へという情報の経路もまた想定することが出来る。『文海』などの記載もそれを裏付けるものではないだろうか。

タングート人の祖先説話「讃歌」の存在もそれを示唆するものと思われる。おそらく、『義海』は、当時存在したタングート人の祖先に関して言及している本を情報源の1つとしていたと言うことが出来るだろう。

以上、『義海』、及び崇宗～仁宗時代に成立した『文海』、『文海雑類』、『同音』背注、『道理』といった西夏語世俗文献を検討したところ、タングート人の祖先の名に関する記載が見られた。また、崇宗～仁宗統治下の西夏王国に於いては、タングート人の祖先についての記載が見られる文献が存在したことを確認することが出来た。

また、タングート人の祖先に関する情報が官刻本の『義海』に収録さ

れていると言うことは、それらの知識が正統なものとして後世に伝えられようとしていたことの表れであると言える。また、私刻本であり、社会への流布が期待された『道理』にも、そういった記載が見られることは、それらの情報について社会に周知させる狙いがあったと考えることも出来る。

以上のように『義海』を中心とした西夏語世俗文献の分析からは、タングート人自身の文化継承の様子を窺い取ることが出来た。タングート諸部族時代から、西夏王国が建国され、年代を経て、多民族、多文化共存社会となった西夏王国に於いて、支配者層たるタングート人の文化はこのように受け継がれていた。これは、西夏王国社会の持つ保守的側面の1つであると言えるだろう。

おわりに

西夏王国の最盛期である仁宗時代に編纂された西夏語の類書『義海』には、タングート人の祖先説話とタングート人の祖先についての記載が見られる。『義海』に記されるタングート人の説話には、これまで西夏語史料、チベット語史料から知られていたタングート人の祖先説話とは、異なる系統のものが採録されていることが分かった。『義海』が様々な文献から情報を引用して作成された類書であることから考えると、『義海』に収録されている、タングート人の祖先説話とその祖先についての情報は、『義海』が出版されるより以前の段階に存在しており、それに関する情報を記す書物、あるいは口承によって、『義海』編纂の当時まで、タングート人の記憶に留められていたと考えられる。

つまり、そうした情報を記す文献が『義海』の成立以前から存在したと考えることが出来る。では、そういった文献やタングート人の祖先についての「記憶」の存在は、他史料から在証することが出来るのかについて検討した。

崇宗、仁宗時代に作成された字書『文海』、『文海雑類』、韻書『同音』

背注、格言集『道理』には、タングート人の祖先の名について記載を見出すことが出来る。『義海』以外の書物にも、そういった情報が記載されていることは、当時そうした情報が存在していた証左となる。

また、既存の文献から文章を集めて作られた『道理』に、タングート人の祖先についての記載が見られることは、『道理』が情報源としたある文献に、タングート人の祖先に関する記載が存在したことを示している。また、『道理』が情報源としたものの1つは、「𐰽𐰚 (2mi:) の格言」を記している書物であったことが分かった。

『義海』に見られるようなタングート人の祖先説話、あるいは「𐰽𐰚 (2mi:) の格言」を記した文献を通じて、タングート人達の間で、その祖先についての「記憶」は保たれていたと考えられる。また、そういった「記憶」を官刻本の『義海』及び官刻本と考えられる『文海』に記載していることは、『義海』、『文海』の編纂者がタングート人の祖先説話、そして、その祖先に関する「記憶」を公式な形で後世に正しく伝えようとした意思を読み取ることが出来るだろう。

追記: 本稿は International Workshop: Central Asian Documents Preserved in the Institute of Oriental Manuscripts, Russian Academy of Sciences. (2015年3月24日～3月25日、於: 東京外国語大学アジア・アフリカ研究所) にて、“Tanguts and its ancestor. —based on *The Sea of Meanings, Established by the Saints.*—” というタイトルにて発表したものと、2014年1月に龍谷大学に提出した博士論文に基づくものである。

注

- ① チベット語から西夏語に翻訳された仏典に関しては、Кычанов, Е.И. & Т.Нисида & С.Аракава (1999) のリストを参照。
- ② 『遼史』『金史』の編纂過程については、古松崇志 (2003a) を参照。また、『金史』世紀の編纂については古松 (2003b) を参照。
- ③ ここでは、叙事詩、伝説、昔話など「集団の記憶」を伝えるジャンルを祖先説話とする。

- ④ 遼朝や金朝については、正史などをもとに始祖伝説などの説話の研究が行われた。遼朝については、蒲原大作（1982）、金朝については、内藤湖南（1915）、田坂興道（1938）、三上次男（1941）を参照。
- ⑤ ツェルパ・カグユ（Tshal pa bKa' rgyud）派の僧侶クンガードルジェ（Kun dga' rdo rje、1309～1364 年）によって記されたチベット仏教史書。
- ⑥ 西夏語原文を直訳すると「聖なるものによって立てられた義の海」となる。ロシアの研究者は、“Море значений, установленных святыми.” というタイトル、中国の研究者は『聖立義海』というタイトルを使用する。本稿では、西夏文字を逐字的に漢字に置き換えたタイトルである『聖立義海』と表記する。以下、西夏語文献のタイトルには、概ね西夏文字を逐字的に漢字に置き換えたタイトルを用いる。
- ⑦ 用紙を 1 枚ごとに 2 つ折りにして、各紙の折り目の外側 1 センチ程度に糊を付けて貼り重ね、表紙を付けたもの。
- ⑧ 西田（1997, 375）は、この中国語訳について、細部で誤りが多く訂正を要すると述べている。
- ⑨ 類書については伊藤美恵子（2005）、栃尾武（1978;1979;1980）を参照。
- ⑩ 版心に刻工の姓が見られることについては、史（2013, 94～95）。
- ⑪ 『俄藏』10 卷：247
- ⑫ 西夏語の刊本には、刻本と活字本の 2 種が存在する。刻本には官刻本、私刻本（坊刻本）、寺院刻本がある。
- ⑬ 「学士」とは、番・漢大学院で教育を受けたものの中で、有能な者に与えられた称号で、官僚として登用された（佐藤 2007, 52）。
- ⑭ 『俄藏』10 卷：243
- ⑮ 特に『夏漢字典』（李範文 2008）収録字に言及する際には、整理番号を付す。
- ⑯ 『俄藏』にて丁種本に分類される版本には、裏面に草書体西夏文字で注記されているものが見られる。具体的事例に関しては後に触れる。
- ⑰ 『義海』の該当箇所版心には、「蕤五（立五）」とあり、一見「第 5 卷」のような印象を受けるが、実際には「第 15 卷」であることに注意する必要がある。
- ⑱ 母方の「オジ」を示す言葉には、母の兄を示す「伯父」、母の弟を示す「叔父」の 2 つがある。西夏語の「母方のオジ」を表す言葉「𐽳、推定音 1gI:、『夏漢』No.0597」には、母の「兄」か「弟」かの区別はない。故に、ここでは「母方のオジ」と表記する。以下、西夏語の推定音を表記する際には、荒川慎太郎（1997;1999）の西夏語推定音表記に基づいてローマ字転写する。ほとんど全てのチベット・ビルマ共通祖語（PTB）では * Ku が「母方のオジ」を表す（長野

禎子 1993, 115)。チベット・ビルマ系言語に属する言語である西夏語「lgI:」もこれに関連するものではないかと考えられる。なお、西夏語で「母方のオジ」を表す語句には「𐽄、『夏漢』 No.355、推定音 lmyu」、「𐽄、『夏漢』 No.2264、推定音 lko」という語彙も見られる。

- ⑲ 『俄藏』 10 卷：260
- ⑳ 親同士が異姓の兄弟姉妹の関係にある、いとこ同士の結婚。
- ㉑ 『俄藏』 10 卷：265
- ㉒ 『俄藏』 10 卷：253
- ㉓ 『俄藏』 10 卷：245
- ㉔ 『文海』 には、「𐽄」について「[時が] 過ぎたことを言う」（『文海』：15/171）とあり、「昔」を意味することが分かる。故にここでは「先人」と訳す。
- ㉕ 『番漢合時掌中珠』 については、西田（1964; 1997）、李範文（1964）、佐藤（2006）を参照。
- ㉖ 『俄藏』 10 卷：333
- ㉗ 『俄藏』 10 卷：328
- ㉘ 『同音』（新版）には紀年が見られないが、編者の梁徳育が 1176 年に死去していることから考えると、1176 年以前の段階で出版されたと推定されている（西田 2007, 66）。
- ㉙ 『俄藏』 10 卷：342
- ㉚ 『俄藏』 10 卷：328

参考文献目録

《略号》

- 『英藏』：北方民族大学、上海古籍出版社、英国国家図書館〔編〕『英国国家図書館蔵黒水城文獻』上海古籍出版社、1～5 卷、2005～2010 年
- 『夏漢』：李範文（2008）
- 『俄藏』：史金波、魏同賢、Е.И. 克恰諾夫〔主編〕『俄羅斯科学院東方研究所聖彼得堡分所蔵黒水城文獻』上海古籍出版社、1～20 卷＋、1996～2013 年
- 『クチャーノフ辞典』（СТЯ）：Кычанов, Е.И.&С. Аракава, *Словарь тангутского (Си Ся) языка: тангутско-русско-англо-китайский словарь*. Филологические науки, Университет Киото.2006.

《史料》

西夏語史料

- 『義海』：『聖立義海』（『俄藏』10 卷所収）
『惟字』：李範文、中島幹起〔編〕（1997）
「讃歌」：「タングートの聖なる根源を讃える歌」 Кычанов（1968）
『掌中珠』：『番漢合時掌中珠』（『俄藏』10 卷所収）
『同音』：（『俄藏』7 卷所収）
『道理』：『新集錦合道理』（『俄藏』10 卷所収）
『文海』：史、白、黄〔編〕（1983）

チベット語史料

DM : Kun dga' rdo rje, *Dep ther dmar po*. Mi rigs dpe skrun khang. 1981.

《参考文献》

（日文）

- 荒川慎太郎 1997：「西夏語通韻字典」『言語学研究』16
1999：「夏蔵対音資料からみた西夏語の声調」『言語学研究』17-18
2010：「西夏語の格標識について」『チベット＝ビルマ系言語の文法
現象1：格とその周辺』アジア・アフリカ言語文化研究所
伊藤一馬 2012：「黒水城出土「宋西北辺境軍政文書」一概要と研究状況－
『内陸アジア言語の研究』27
伊藤美恵子 2005：「類書について」『お茶の水女子大学中国文学会報』24
蒲原大作 1982：「契丹古伝説の一解釈－シャーマニズム研究の一環として－
『民俗学研究』47-3
佐藤貴保 2006：「西夏の用語集に現れる華南産の果物－12世紀後半における
西夏貿易史の解明の手がかりとして－」『内陸アジア言語の研究』21
2007：「西夏の二つの官僚集團－十二世紀後半における官僚登用法
－」『東洋史研究』66-3
佐藤貴保、赤木崇敏、坂尻彰宏、呉正科
2007：「漢蔵合璧西夏「黒水橋碑」再考」『内陸アジア言語の研究』
22

史金波（ソーハン・ゲレルト訳）

1999：「西夏文書と西夏史」『史滴』21

田坂興道 1938：「完顔氏の三祖伝説に就いて」『歴史学研究』8-6

枅尾武 1978：「類書の研究序説（1）：魏晉六朝唐代類書略史」『成城国文学論集』10

1979：「類書の研究序説（2）：五代十国宋代類書略史」『成城国文学論集』11

1980：「類書の研究序説（3）：五代十国宋代類書略史承前」『成城国文学論集』12

内藤湖南 1915：「女真種族の同源伝説」『民族と歴史』6-1

長野禎子 1993：「チベット語の「母方のオジ」を示す語彙」『内陸アジア言語の研究』8

ニコライ・ネフスキー、石濱純太郎

1933：「西夏国名補正」『龍谷大学論叢』305

西田龍雄 1964：『西夏語の研究』I、座右宝刊行会

1986：「西夏語『月々楽詩』の研究」『京都大学文学部研究紀要』25（西田 1997 に再録）

1988～1990：「西夏王国の文化」『出版ダイジェスト』二玄社（西田 1997 に再録）

1997：『西夏王国の言語と文化』岩波書店

2005：「西北第二民族学院、上海古籍出版社、英国国家図書館 編『英蔵黒水城文献①』」『東洋学報』87-3

2007：「西北第二民族学院・上海古籍出版社・英国国家図書館編『英蔵黒水城文献』②③④」『東洋学報』88-4

古松崇志 2003a：「女真開国伝説の形成—『金史』世紀の研究—」『「古典学の再構築」研究成果報告集V『論集 古典の世界像』

2003b：「脩端「辯遼宋金正統」をめぐる—元代における『遼史』『金史』『宋史』三史編纂の過程—」『東方学報』75

松澤（野村）博

1982：「西夏文『新集錦合道理』について」『小野勝年博士頌寿記念東方学論集』龍谷大学東洋史学研究会

三上次男 1941：「金室完顔家の始祖説話について」『史学雑誌』52-11

李範文、中嶋幹起〔編〕

1997：『電腦処理西夏文雑字研究』不二出版

(中文)

克恰諾夫、李範文、羅矛昆

1995：『聖立義海研究』寧夏人民出版社

史金波、魏同賢、E.И. 克恰諾夫〔主編〕

1996～2013：『俄羅斯科學院東方研究所聖彼得堡分所藏黑水城文獻』
上海古籍出版社、1～20 卷＋。

史金波、白濱、黃振華〔編〕

1983：『文海研究』中國社會科學出版社

史金波 1995：「西夏語的“買”“壳”和“嫁”“娶”」『民族語文』1995 年 4 期

2004：「西夏戶籍初探—4 件西夏文草書戶籍文書識讀研究—」『民族研究』2004 年 5 期

2013：『西夏文教程』社會科學文獻出版社

聶鴻音、黃振華

2001：「西夏《聖立義海》故事來源」『隴右文博』2001 年第 1 期

張迎勝 2006：「西夏人的天神崇拜」『西夏研究』3 輯

2008：「西夏人的自然崇拜管窺」『第三屆西夏學國際學術研究會論文集』

楊蕤 2008：『西夏地理研究』人民出版社

李範文 1964：『宋代西北方音—《番漢合時掌中珠》對音研究—』中國社會科學出版社

1996：「藏傳佛教對西夏的影響」『歷史文物』6-3

1997：『夏漢字典』寧夏人民出版社（增訂本 2008 年、中國社會科學出版社）

(歐文)

Горбачева, З.И. & Кычанов, Е.И.

1963: *Тангутские рукописи и ксилографы*. Москва.

Kepping, K.

1995: "The Official Name of the Tangut Empire as Reflected in the Native Tangut Texts." *Manuscripta Orientalia* vol.1, no.3

Кычанов, Е.И.

1968: "Гимн священный предком тангутов." *Писименные памятники*

Востока. ежегодник.

1997: *Море значений, установленных святыми.* Санкт-Петербург.

Кычанов, Е.И. & Т.Нисида & С.Аракава

1999: *Каталог тангутских буддийских памятников.* Киото.

Stein, R.A.

1951: “Mi nyag et Si-Hia. Geographie historique et légendes ancestrales.” *Bulletin de l'École française.*

(龍谷大学仏教文化研究所客員研究員)